

Def Doc No 1783

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國其他

對

荒木貞夫其他

宣誓供述者

供述者

豐高房太郎

自分儀我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ元ヅ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上
次如ク供述致シマス

一、私ハ明治貳拾貳年壹月五日本籍地デアル山口縣防府市中蘭町大字向島
八三二ノ一番地ニ生レ、現在東京都世田ヶ谷區代田一丁目六百二十五番地
一住ンデオリマス

一、私ノ經歷ハ大要左ノ通りデアリマス

明治四十二年陸軍士官學校卒業

昭和九年三月陸軍大佐ニ任セラシテ郡城聯隊長

昭和十二年十二月陸軍少將ニ任セラル

昭和十五年八月陸軍中將ニ任セラル

昭和十五年十月任支那第三師團長ニ任セラレ支那ニ赴任

昭和十七年一月中旬近衛師團長

昭和十九年十月任ニニ、予ニヤ第二軍司令部官ニ任セラレ「セレベス」在

任中参戦トナル

二、昭和十六年夏ニナリマスト長沙方面ノ支那軍カ非常ニ優勢ニナツテ來
マシテ日本軍ニ對シ攻勢ヲトル様ニナツテ日本軍ハ非常ナル脅威ヲ感ジ
ル様ニナリマシタ。

ソレデ此ノ長沙附近ノ支那軍ヲ一撃スル目的デ長沙方面ニ向ツテ兵ヲ進メルコトニナリマシタ。ソレデスカラ此ノ作戦ハ土地ヲ占領スルノカ目的デハナク只軍ニ敵兵刀ノ撃碎ニアリマスノデ目的達成次第直ニ原駐屯地ニ歸還スルコトニナツテオリマシタ。

三、私ノヒキイテキル第三師團ハ他ノ第四、第六、第四十師團ト共ニ行動ヲ起シ同年十月初旬ニ右師團ノ内第四師團カ長沙ノ町ニ入りマシテ三日バカリ其處ニ滞在シテ直ニ又モトノ滞在地ニ引カヘシテシマヒマシタ。私ノ第三師團ハ長沙ト少シ距テキル株州マデ進軍シマシタガ長沙ノ町ニハ入りマセンテシタ。ソシテ其處カラ又モトノ漢口ノ近クハ歸還シマシタ。

四、此ノ作戦間日本軍ノ軍紀ハ非常ニ嚴肅デアリマシテ日本軍ノ行動ハ非常ニ立派ナ模範的ノモノデアツタコトヲ明言致シマス。支那派遣軍デハ軍紀ノ嚴肅ト云フコトニ最モ力ヲソ、ギマシテ昭和十六年三月頃軍司令官ハ漢口ニ軍内ノ各師團長等ヲ集メマシテ其ノ軍紀ノ肅正ニツイテノ會同ヲ致シタコトガアリマス。其ノ時司令官ハ「日本軍ノ

精華ハ只強イバカリデハナイ武士道ノ眞ノ精神ニ基キ正シキヲ助ケ悪ヲ
控キ作戦地ノ住民ニ對シテモ親切ヲ旨トシテ眞心ヲ以テ接シナケレバ
ケヌ。作戦中ト雖モ住民ニ不必妥テ危害ヲ加ヘタリ、財物ヲ毀損シタリ
スルコトハ最モ武士道ノ精神ニソムクモノデアル。師團長ハ自己部隊ニ
武士道ノ精神ニ反スル者ノ絶對ニナキコトヲ期セネバナラヌト云フ主
旨ノ嚴格ヲ強イ訓示ヲサレマシタ。

各師團長ハ右訓示ノ主旨ヲ部下全軍ニヨク遵守サセマシタ。

支那派遣軍ニハカネテカラ焼クナ。殺スナ。掠ルナ。ノ三禁ノ原則ガア
リマシテ在支日本軍ハヨク此ノ上司ノ命令ノ主旨ヲ体シテ軍人トシテ恥
ル様ナ行爲ハ絶對ニシナカツタノデアリマス

私ノ第三師團ノ作戦中モ敵ノ兵營ハ燒却シタ方ガヨロシカロウト云フ論
カ出マシタ。ケレドモ私ハ敵ノ兵營モ民家ヲ利用シタ兵營モアリ、日本
兵ニ兵營ト雖モ燒却フ様ナ看做デモツケルト大變デアル或ハ差別ガツカ
ナクテ民家デモ燒クト困ルカラ兵營ト雖モ絶對ニ燒却ツテハイケヌト云
フ嚴命ヲ下シテ敵ノ兵營サヘモ燒却ノコトヲ嚴禁シマシタ。

五、ソレカラ昭和十六年末カラ昭和十七年初メニカケテ二度目ノ長沙攻略ヲシマシタ。ソノ目的ハヤハリ此ノ前ノト同一デアリマシテ此ノ時ハ私ノ第三師團ト第六師團トテ長沙方面ノ支那軍ニ對シテ攻撃ヲ致シマシタガ長沙ノ近クマテ進軍シタタケテ長沙マデハ行キマセンド歸還シマシタ。六、私ノ在支期間中私ハ司令官ノ御主旨ニ從ヒ軍紀ノ嚴肅ニツキテハ最モ意ヲ用ヒ私ノ部隊ハ其ノ誦非難セララルベキ何物モナキコトヲ確信致シテオリマス。

昭和二十二年（一九四七年）六月十五日 於東京

供 証 者

嶋 房 太 郎

右ハ當立習人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明シマス

同日於同所

立 習 人 今 成 泰 太 郎

Def Doc No. 1783

宣
誓
書

良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ黙秘セズ又何事ヲモ附加セザルコトヲ
誓フ

署名捺印

豊

嶋

房

太

郎

6